

HIMALAYA

ヒマラヤ

No.328



1999 MARCH



日本ヒマラヤ協会
THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN ——— HAJ

未踏・未知を求めて

中国登山20年

山森 欣一

中国領ヒマラヤ登山20年の概要

1. はじめに

日本の約25倍の国土を有し、ロシア、カナダに次いで世界第三位の面積を誇り、14ヶ国と国境を接しているのが中華人民共和国（以下中国と略す）である。この中国には、多くの山脈が走っている。大興安嶺、泰嶺、南嶺、横断、ヒマラヤ、ガディセイ、カラコルム、パミール、崑崙、天山、アルタイなどであり、これらの山脈には9つの8千メートル峰を含めて、無数の高峰が聳え立ち、岳人にとっては魅力に溢れた国となっている。

南はインド、ブータン、ネパール、パキスタンなどのヒマラヤ諸国と国境を接し、7千～8千メートル峰の多くは、これらの国々との国境地帯であるヒマラヤ山脈、カラコルム山脈にある。また、西はアフガニスタン、タジキスタン、キルギス、カザフスタン、北はモンゴル、ロシアと国境を接し大興安嶺、パミール、崑崙、天山、アルタイなどの山脈がある。東は北朝鮮であり、その他の内陸にも多くの山脈があり、5千～7千メートル級の山々が数知れずある。

このような広大な領土を持つ中国には、高峰ばかりでなく、長江、黄河、黒竜江、珠江、海江、淮河、ヤル・ツァンポーなどの大河が流れ、また、代表的な青蔵、内蒙古、黄土、雲貴の高原が広がり、ツァイダム、タクラマカン、ジュンガリなどの砂漠が横たわり、これらの要素が重なりあって

未踏査地域を作りだしている。

狭い日本の自然環境とは、かけはなれたスケールを持つ中国登山の特徴は、山へのアプローチ・マーチにあると云えよう。それは、ある時は半砂漠化した高原をジープで走り、大河を渡るために筏を使い、ラクダやヤクによるキャラバンがあり、時としてはうっそうたる森林の中の道無き道を、鉋と鋸で切り拓いて行くのである。

そのアプローチ・マーチには、数々のアドヴェンチャーが岳人達を待ち受けているのである。中国はまた、シルクロードや西遊記、三国志、ケサル大王、長征など伝説と歴史旧蹟に満ち満ちており、この面からも山へ行き着くまでに充分岳人達の好奇心をみたしてくれるのである。

2. 開放前の中国ヒマラヤへの熱き想い

世界中の岳人で、中国の山に登りたくない者がいるだろうか。しかし、第二次世界大戦が終わっても中国は国民党と共産党の激しい内戦が続いた。この戦いの中、1949年10月1日に共産党は〔中華人民共和国〕の建国宣言を行った。その後も共産主義の旗印の下に、祖国の建国の真っ最中であり登山どころではなかった。

前述したように中国が自分達の登山活動を始めたのは、大戦終了後10年たった1955年のことであり、中国登山協会が正式に発足したのは、3年後の1958年である。この頃は外国の登山隊（旧ソ連

を除く)を受け入れられる状況にはなかったのである。

しかし、世の中が少し落ち着いて来ると、世界の岳人が手をこまねている訳も無く、1955年には日本登山界の先達であるAACKが、中国科学院長で日本に馴染みの深い郭沫若を通して登山の打診を行った。(ヒマラヤへの道・P35)

さらに1964年には東北大学山の会も、中国登山協会に中国と合同による登山と学術調査の申請を出した。(チベット高原の盟主—ニエンチェンラ・P17)

また、全日本山岳連盟は1957年に中華全国体育総会に合同登山の申し入れを行ったが、翌年に[まだ登山組織ができていない]と断われている。しかし、これにもめげず、62年春にネパール・ヒマラヤのビッグ・ホワイト・ピーク(現在はレンポ・ガン6,979m)を初登頂したのを期に、再び[全日本山岳連盟]会長・尾関広と海外登山委員長・高橋照の連名で、[中華全国登山家協会]首席・栗文彬宛てに、64年春に合同でシシャバンマに登山したい、と申し入れを行い、その後も何度か文書のやりとりが続いた。

だが、皮肉なことにシシャバンマは1964年5月(日本側が合同登山を希望した時期)に中国隊によって初登頂されるのである。

以上紹介したのは、あまたあったと思われる日本から中国に対する登山申請の一例である。このように日本だけでも、ありとあらゆる可能性を求めて、岳人達は中国登山の実現に奮闘努力していたのであった。

1972年には田中角栄首相の訪中によって、[日中国交正常化]が実現した。このことによって、中国登山の可能性も今までの雲を掴むような手探りの状態から、一步も二歩も前進するかに思われた。

ところが前述したように、当の中国国内はまだ[文革]が継続中であり、国交の正常化が実現したからといって、すぐに外国の登山隊を受け入れるような状況にはなかったのである。

だが、国交正常化以後に日本から出された公式、非公式の登山・学術申請は国交正常化以前に比べると飛躍的に増えた。ちなみに当時の中国登山協

▼1986年夏 H A J主催「中国登山研究会」



会・史占春副主席は、開放初期の1981年に発行された[中国の高峰]の中で1955年中国登山活動が誕生してから20年間に、30ヶ国以上の100余りの団体や個人から、相前後して登山申請があった、と書いている。(同書・P8)

そして、1993年に中国で発行された[中国登山運動史]には、申請は日本が40、オーストリア11、アメリカが7だったと紹介しており、その他の国名も18上がっている。(同書・P208)

しかし、これらの申請に対しては、中国側からは国交正常化前と同じく[登山組織を準備中]との回答しか来なかったのである。当時の中国国内の状況を考えると、これは致し方のないことであったと言えるだろう。

中国には[龍(辰)の年には首脳が死ぬ]という伝説があると云う。1976年はまさに龍の年でその通りになった。即ち、中華人民共和国を創り上げた[長征組]の巨頭のうち最もビッグな毛沢東、周恩来、朱徳の3人が相次いでマルクスに会いに行ったのである。

以後、華国峰による4人組の逮捕、その華国峰の失脚と続き、鄧小平が政権を握り[4つの現代化]を推進する中で、改革・開放の一環として岳人待望の中国登山が解禁される運びとなった。

この間、国家体育運動委員会や旅遊局で、開放に向けた具体的な作業が進み、1978年と79年には、史占春らがネパールに赴き、観光省や旅行社を訪問し、これらを参考にして具体的な規則作りを行い、1979年9月国務院の承認を得て、世界に発表されたのである。(中国登山運動史・P210~212)

3. 中国領ヒマラヤの解禁

中華人民共和国（以下、中国と略す）が、外国人に自国の高峰を1980年から開放すると発表したのは、79年9月のことであった。

開放の対象は、チベット自治区のチョモランマ、シシャパンマ、新疆ウイグル自治区のコンゲール、ムスターグ・アタ、コンゲール・チュビエ、ボゴダ、四川省のミニヤ・コンカ、青海省のアムネマテンの8座であった。81年には、新疆ウイグル自治区のチョゴリ、ガッシャーブルムⅠ&Ⅱ、ブロード・ピーク、四川省のスークーニャンの5座も開放された。

開放当初から、開放された峰の隣接峰は、姉妹峰として登山許可の対象となったため、チョモランマの北にあるチャンツェ、シシャパンマの東にあるモラメンチン、西にあるポーロン・リ、チョゴリの北西にあるクラウンなども登られた。

その後の開放は、登山隊側の申請に基づいて中国国内の事情を勘案して、随時開放されるようになった。

開放後は8千メートル峰を中心にありとあらゆる困難な登山が繰りひろげられた。たとえばチョモランマだけをみても、メスナーは完全な単独無酸素で登頂に成功したし、ロレタンとトロワイエのペアは、往復44時間でチョモランマ北西壁をアルパイン・スタイル、無酸素で登下降した。

また、登頂に成功はしていないが、1983年からは、チョモランマを冬に登ろうと意欲的な試みが、カモシカ同人や長谷川恒男によって実践された。

そして、1988年には、国境を越えた南北縦断計画が、中国、ネパール、日本三国によって実践され日本側では、山田昇が北から南へと縦断に成功し、同行取材をしたテレビ・カメラが頂上まで持ち上げられ、日本の茶の間に生で頂上の映像が映し出された。

未踏峰の分野では圧倒的に日本隊の活躍が目立つ。これは何も地理的に日本が中国に近いばかりが原因ではないと思う。

これまでも日本隊はヒマラヤが新しく解禁されるとドッと押し掛け、熱が冷めるとさっと引き上げた歴史がある。カラコルムもガルワールもカシ

ミール、ガンゴトリもブータンもそうであった。

ところが中国登山熱だけは、相変わらずの盛況が続いている。これはただ単に中国の国土が広いばかりが原因ではない。

中国登山が解禁された当初は、[中国登山は高くつく]との風評が立った。事実未踏峰や外国隊が初めてトライする山については、特別な料金設定がありコスト高であったのも事実である。それでも登山隊が減少しないのである。

その理由の一つに[戦争の加害者意識]があると思う。日中戦争で日本は中国を侵略し、中国の多くの地域に爪痕を残して来た。その後ろめたさを感じている年代層が登山隊のスポンサーになっていることが多いのである。

この種の登山隊のスポンサーになっている年代の人達には、[日中友好]を旗印に掲げ、登山やトレッキング、同行した観光によって中国にお金を落とすことによって、少しでも過去に犯した過ちを償いたいという気持ちを感じる。

このような背景を抱えた登山隊の多くは、一過性の面を持っているので、登山費用の面でも多少甘くなり勝ちである。そのことが、中国側に与える影響は少なくないと言えよう。

4. 中国登山の特殊性

中国登山の特徴は「請負制」にあった。つまり、ネパールやパキスタンでは、登山の実行に必要なポーター、車、動物の雇用、ホテル宿泊、航空券の手配、食糧の買い出しなどを登山隊が全て取り仕切るのに対して、中国登山規則では、これらについては、全て中国登山協会が請け負い、登山隊が手を出すことはできないのである。そして、これらの費用の全額を登山隊が中国に入国する1ヶ月前までに納入しなければならないのである。尤も、最近では、買い出しについては、登山隊が直接行うことができるようになった。

但し、請負制であっても、現場ではそれが完全に履行されないことが多かった。つまり「××日9時にヤク20頭が来る」と言っても一向に現れないのである。そのような悶着が結構多く報告されていた。

中国は若い国である。そのため国の変化のスピー

ドも激しいし、沿岸と内陸など地理的に経済の発展にも相当の温度差がある。その影響も中国登山に如実に現れてきた。

特に費用の面では、86年頃からそれまでの「中国元」建てから「アメリカドル」建てになり一気に割高を感じさせた。

一方、日本円の円高効果も進んだ。81年当時は、1元=132円程度であったものが、85年=90円、86年=55円、87年=38円となり、現在では、15円程度であることを考えると隔世の感がある。

中国登山でもう一つ特徴的なことがある。それは日本隊の圧倒的な活躍である。別表のとおり、この20年間で289隊2,637人が入山している。また、主な山の初トライについても表でわかるように、8割を日本隊が占めているのである。その後の登山を見ても、日本を除く外国隊は、チョモランマ、チョー・オユー、シシャパンマ、ムスターグ・アタに集中している。これに対して日本隊は、中国全土の高峰に足跡を残しているのである。

中国は、多民族国家である。主たる「漢族」のほかに55の少数民族がいて、登山活動の場となる地域の殆どは、これら少数民族の住むところである。

このため多くの岳人は、登山計画が進むに連れて、訪れる先に生活している少数民族に関心を持ち、かつ、これらの少数民族を知ることが、登山を成功させるために不可欠であることに思い至る。正にそのとおりである。

しかし、中国の場合、多民族国家の実態は、絶対多数を占める「漢族」が国家・政治の中心であることを理解の中心におかなければ、登山の成功はありえない。他の国のヒマラヤ登山と違って、中国登山は少数民族に対する深い関心と同時に、「漢族」の長い歴史や「中華思想」に代表される中国人の考え方、などについて一定の知識を身につけて実行することを勧めたい。

また、現在の中国は、世界でも独自の社会主義国家を目指している国である。好むと好まざるとにかかわらず、中国流の解釈が全てを決定する。登山は戦争ではない。所詮相手国の許可があって成り立つものであり、契約万能主義をベースにして物を考えているとケンカが絶えない。間違っ

ても主義主張が違うからといって、その相違を正そうとしないことだ。私達は、登山に行くが故に招待状が発行されたのであって、教育のための招待状ではないのだから。

呉々もこのことを肝に銘じて置くべきであろう。郷に入れば郷に従えである。

5. 日本隊によるユニークな活動

1) 長野県山岳協会の合同研修

1980年秋、喬加欽団長ら中国登山協会の代表団が、春のチョモランマ登山に成功した日本山岳会からの招きによって訪日した。この時、長野県山岳協会は、[日中合同登山技術研修会]の開催を提案した。以後日中の協議の末、日本側の組織としては日本山岳協会が主催し、長野県山岳協会が主管し10年間継続することで合意した。

研修は、両国で交互に開催された。1981年4月には王振華を団長とする9人が来日し、合同研修の第1回目がスタートした。研修は八方尾根、中央アルプス、ハケ岳、穂高岳などを舞台に行われ、来日した中国側の9人全員が、当時の日本山岳協会第2種指導員検定を受け全員が合格した。翌82年の第2回目は、日本の武田武を団長とする15人が訪中し、新疆のボゴダ峰で行われた。(天山友誼P115~116)以後交互に訪問し合って研修が続けられ、登山交流として多大なる成果を上げたのである。

また、長野県山岳協会は、中国登山界の岩登り技術向上のために建設された、北京郊外にある人工岩場の推進にも多大なる協力をしている。

そして、西藏登山協会と姉妹協定を結ぶなど、中国登山では異彩を放っているのである。

2) 若手の養成を計った日本山岳会

1980年春に、チョモランマ登頂に成功した日本山岳会は、有志の発案により学生を中心とした若い会員の育成のために、新疆のボゴダ山群の許可を1981年から5年間継続して取得した。(山岳第七十七年・P74)

この山群では、1981年から84年までの4年間でI峰主峰の登頂、II峰初登頂、I峰西峰~中央峰(初登頂)~南峰縦走などの成果を上げた。

ボゴダ山群での活動は84年に終了し、85年には

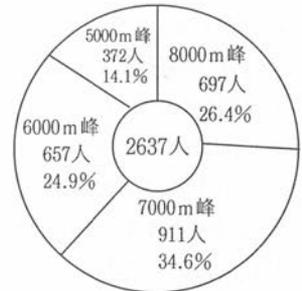
中国の主な高峰の開放後、初トライ一覧表

◎初登頂 ●初登攀 ◐下部初登攀 ○成功 ×失敗 ■偵察 ★合同隊

	山名	標高	経年	派遣母体	備考
1	チョモランマ	8848	○	1980 J A C	北西壁◐
2	マカルー	8463	◐	1995 J A C	○
3	チョー・オユー	8201	○	1987 カモシカ	パラパント降下
4	シシャバンマ	8027	○	1980 ドイツ	
5	チョモレンゾ	7816	●	1993 立教大学	
6	ナムチャ・バルワ	7782	×	1991 J A C★	1992◎ J A C★
7	ナムナニ	7694	◎	1985 京大/同大★	
8	ガンカル・ブンスム	7570	■	1998 J A C	
9	チャンツェ	7553	◎	1982 ドイツ	
10	クーラ・カンリ	7538	◎	1986 神戸大学	
11	ラプチュ・カン	7367	◎	1987 H A J★	
12	チョー・アウイ	7354	◎	1986 H A J	
13	チョモラーリ	7326	●	1996 長野★	
14	スークァン・リ	7308	◎	1989 大阪市大	
15	カンベンチン	7299	◎	1982 京都大学	
16	ギャラ・ペリ	7294	◎	1986 H A J	
17	ポーロン・リ	7282	◎	1982 大分岳連	
18	ニンチン・カンサ	7206	×	1985 大分岳連	1986◎ T M A
19	メンルンツェ	7181	×	1987 イギリス	1992◎ スロヴェニア
20	ニェンチェンタンラ	7162	◎	1986 東北大学	
21	ガウリサンカール	7134	×	1997 山野井	
22	ルンボ・カンリ	7095	×	1994 H A J	1996◎ 韓国★
23	カント	7055	◎	1988 同志社大	
24	チョム・カンリ	7048	◎	1996 韓国★	
1	チョゴリ	8611	○	1982 J M A	
2	ガッシャーブルム I	8068	×	1989 宮城岳連	●中央峰に登頂
3	ブロード・ピーク	8051	×	1992 イタリア	
4	ガッシャーブルム II	8035	■	1998 立教大学	
5	コングール	7649	◎	1981 イギリス	
6	ムスターグ・アタ	7546	○	1980 アメリカ	
7	トムール	7435	×	1986 女子登攀	
8	クラウン	7295	×	1985 H A J	1993◎ J A C東海
9	無名峰 (崑崙)	7167	◎	1986 東京農大	
10	ウルグ・ムスターグ	6973	◎	1985 アメリカ	
1	ミニヤ・コンカ	7556	×	1980 アメリカ	1982○ スイス
2	シンチン	6860	×	1988 H A J	1992◎ H A J
3	メーリー・シュエシャン	6740	×	1987 上越山協	
4	グラタンドン	6621	◎	1985 青蔵研究	
5	アムネマチン	6282	◎	1981 上越山協	

中国領ヒマラヤ
日本隊

標高別入山者

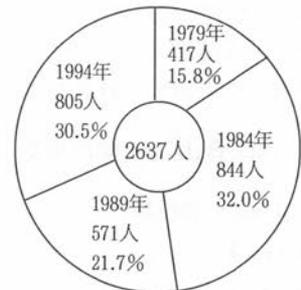


8,000m峰 697人 26.4%
7,000m峰 911人 34.6%
6,000m峰 657人 24.9%
5,000m峰 372人 14.1%
合計 2,637人



チベット 1172人 44.4%
新疆 896人 34.0%
四川 251人 9.5%
青海 193人 7.3%
その他 125人 4.8%
合計 2,637人

年代別入山者数



1979～1983年代 415人 15.8%
1984～1988年代 844人 32.0%
1989～1993年代 571人 21.7%
1994～1998年代 805人 30.5%

会の創立80周年に合わせて、キレンとユイチュ（当時はカカサイジモンカ）登山隊が組織された。この計画にはボゴダの思想が引き継がれ、若手を中心として実施された。（日本山岳会中国登山隊1985報告書P1）

3) H A J の活躍

手前味噌になるかも知れないが、我がH A Jの活動も中国登山ではユニークな部類に入るだろう。

H A Jが中国の山に向かったのは1983年である。それ以来1998年までの16年間登山、踏査、探検隊を送り続けた。その数は52隊総勢334名。52隊のうちには、2つの女性合同登山隊（1985年新疆ムッシュ・ムスターグ、94年青海ユイシュ）と3つの合同登山隊（86年四川シュエバオ・ディン、87年西藏ラプチュ・カン、97年クーラ・カンリII）が含まれている。

その結果、7千メートル峰4座、6千メートル峰2座、5千メートル峰2座に初登頂することができた。しかし、2座で7名を雪崩で失ったことは深く反省しなければならない。

その他1983年秋には、84年春にナムチャ・バルワに向かう中国隊の岩登り技術指導のために2人を派遣した。

また、日本国内の中国登山の理解を深めるために、83年夏中国登山協会、86年春四川省登山協会、秋西藏登山協会、99年冬中国登山協会からそれぞれ代表団を招請して〔中国登山研究会〕を開催し、国内の中国登山愛好者に公開した。

これら合同登山、研究会、渉外のための度重なる訪中など、親善、登山交流活動を通して得られた情報やノウハウは、一冊の本に纏められ〔中国登山の手引き〕として発行されて、中国登山を目指す多くの岳人から好評を博しているのである。

6. 中国登山20年間の概観

〔1979年－1983年〕

開放後初のチョモランマ登山の許可を取得した日本山岳会（以下、J A Cと略す）は、79年9月早くも偵察隊をロンブク氷河に派遣し、北西壁の6,500m地点まで偵察したが、北稜偵察チームは、ノース・コル下の6,800m地点で雪崩に遭遇し4人が巻き込まれた。この結果、中国の高所協力員

3人が行方不明となったため偵察は中止された。このように、開放後の中国登山はドラマチックな展開の幕明けとなったのである。

－ 1980年 －

J A C隊は、チョモランマ北西壁下部新ルートからホーバイン・クーロワールを経由して、尾崎隆、重廣恒夫が初登攀に成功。北稜ルートから加藤保男が最後は単独で登頂した。メスナーは、全くの単独で北稜から8月に登頂に成功した。ドイツ隊は、シシャパンマを北東稜から第二登。オーストリア隊も秋にシシャパンマに登頂。アメリカ隊は、ムスターグ・アタに登頂しスキー滑降を行った。ドイツ隊が秋にボゴダにトライするも登頂を断念した。アメリカの二つの隊がミニヤ・コンカにトライし南西稜隊は断念。北西稜隊も雪崩で一人が死亡、二人が重傷を負って登頂を断念した。

－ 1981年 －

女子登攀クラブ隊は、シシャパンマ第四登に成功。ニュージーランド隊は、モラメンチンに初登頂。イギリス隊は、コングールに初登頂し、同時期北面にトライした京都カラコルムクラブ隊は、3人が行方不明となって登頂を断念。防衛大学隊は、コングール・チュビエに登頂。川崎教員隊は、ムスターグ・アタ北峰に初登頂。京都山岳会隊は、ボゴダを初登頂したものの一人がクレバスに転落して死亡した。北海道山岳連盟隊は、未踏の東面からミニヤ・コンカにトライし、頂上直下に迫ったが、一人が滑落し行方不明となり登頂を断念し下山中、7人が滑落死亡した。上越山岳協会隊は、アムネマチンの初登頂に成功した。

－ 1982年 －

イギリス隊は、チョモランマ北東稜をトライしたが、ジョー・タスカー、ピーター・ボードマンの二人が行方不明となり登頂を断念した。ドイツ隊は、チャンツェに初登頂。イギリス隊は、シシャパンマの南西壁を初登攀。大分山岳連盟隊は、ポーロン・リに初登頂。京都大学隊もカンペンチンに初登頂。日本山岳協会隊は、チョゴリの北稜を無酸素で初登攀したが二人が死亡した。スイス隊は、北西稜からミニヤ・コンカに登頂したものの下山中に一人が死亡。アメリカ隊も同ルートから登頂。また、東面からトライした市川山岳会隊は、頂上

直下に迫ったが悪天のため下山中、一人が死亡一人は生還し奇跡の生還と話題になった。

－ 1983年 －

アメリカ隊は、チョモランマ東面のカンシェン・フェイスから初登攀に成功。カモシカ同人隊は、冬の登頂を目指してチョモランマ北西壁にトライしたが断念。中国隊は、ナムチャ・バルワ初登頂をめざしたが、ナイプン峰の初登頂に終わった。イタリア隊は、チョゴリに北稜から登頂。

[1984年－1988年]

－ 1984年 －

オーストラリア隊は、チョモランマをグレート・クローワールから初登攀。ドイツ隊は、北西稜からミニヤ・コンカに登頂。中国隊は、ナムチャ・バルワ登頂を目指したが、再びナイプン登頂に終わった。日本ヒマラヤ協会隊（以下、H A Jと略す）は、ユイロン・シャンにトライするも登頂を断念した。

－ 1985年 －

カモシカ同人隊は、チョモランマ北西壁から冬期登頂を目指したが断念。日中合同登山隊は、ナムナニを西面から初登頂。大分県山岳連盟隊は、ニンチン・カンサに南面からトライしたが断念。青藏高原研究会隊は、グラタンドンの初登頂に成功。米中合同登山隊は、ウルグ・ムスターグの初登頂に成功。H A J隊は、クラウンにトライしたが登頂を断念した。

－ 1986年 －

ロレタンとトロワイエは、チョモランマ北西壁日本ルートから無酸素、アルパイン・スタイルで登頂した。下山も入れて44時間の快挙。H A J隊は、チャー・アウイ、カルジャン、ギャラ・ベリの7千メートル峰3座に初登頂した。神戸大学隊は、クーラ・カンリに西稜から初登頂。東北大学隊は、ニエンチェンタンラに初登頂。女子登攀クラブ隊は、トムールの登頂にトライしたが雪崩のため登頂を断念した。東京農業大学隊は、新疆の7,167m峰を初登頂した。H A Jと中国合同登山隊は、シュエバオ・ディンに初登頂した。

－ 1987年 －

防衛大学隊は、チョモランマ西稜からトライしたが、一人が死亡し登頂を断念した。カモシカ同

人隊は、チャー・オユーに登頂し、高橋和之が頂上からパラバントでBCへ降下した。H A Jと中国合同登山隊は、ラプチェ・カンに西稜から初登頂した。イギリス隊は、メンルンツェの初登頂を目指したが登頂を断念した。ポーランド隊は、シジャパンマ西稜を初登攀。静岡大学隊とイギリス隊は、クラウンの初登頂にトライしたが登頂を断念した。上越山岳協会隊は、メーリー・シュエシャンにトライしたが登頂を断念した。アメリカ隊は、ユイロン・シャンを初登頂した。

－ 1988年 －

中国、ネパール、日本の合同登山隊は、チョモランマの南北縦断に成功し、同行撮影隊によって頂上から生の映像がお茶の間に放映された。国際隊は、チョモランマ東壁新ルートから登頂した。H A J隊は、シジャパンマとチャー・オユーを連続登頂した。イギリス隊は、メンルンツェ主峰を断念し西峰に初登頂した。同志社大学隊は、カントに初登頂した。京都大学隊は、新疆の6,903m峰に初登頂した。H A J隊は、シンチン主峰を断念し18峰に初登頂した。明治学院隊は、チャクラギールに初登頂した。H A J隊は、ゲニに初登頂した。神戸大学と中国の合同隊は、チェルーに初登頂した。

[1989年－1993年]

－ 1989年 －

H A J隊は、チョモランマ北西壁にトライするも登頂を断念。大阪市立大学隊は、スークァン・リに初登頂した。宮城県山岳連盟隊は、ガッシャブルム I に東稜からトライしたが登頂を断念した。京都カラコルムクラブ隊は、コングールの北稜から初登攀した。立正大学隊は、ウルグ・ムスターグの登頂に成功した。仙台一高隊は、チョルパンリク・ムスターグに初登頂した。H A J隊は、シャラリにトライしたが登頂を断念した。

－ 1990年 －

クルティカ、ロレタン、トロワイエは、チャー・オユーを南西壁からアルパイン・スタイルで初登攀し、シジャパンマも南西壁から中央峰に初登攀した。長野県山岳協会隊と中国合同隊は、ザルセル・カンリに初登頂した。横浜山岳協会隊は、チョゴリ北西壁下部を初登攀し、上部日本ルートから

登頂した。横浜市立大学隊は、トムールにトライしたが雪崩のため3人が行方不明となり登頂を断念した。H A J隊は、クラウンの初登頂を目指したが、二人が雪崩のため行方不明となり登頂を断念した。栃木高体連隊は、ムーシュ・ムスターグに初登頂した。J A C東海隊は、シュエレンに初登頂した。

－ 1991年 －

貫田／二上は、北稜からチョモランマに登頂したが、頂上直下で二上が滑落死亡した。50歳代の登山隊であるシルバートール隊は、チャー・オユーの登頂に成功した。長野県山岳協会と中国の合同登山隊は、雪崩のため日本人二人が死亡し登頂を断念した。J A Cと中国合同隊は、ナムチャ・バルワの初登頂を目指したが雪崩で一人が死亡し登頂を断念した。京都大学と中国合同隊は、メーリー・シュエシャンにトライしたが17名が雪崩のため行方不明となり登頂を断念した。

－ 1992年 －

山学同志会とカザフ合同隊は、チョモランマの北東稜にトライしたが、一人が死亡し登頂を断念した。J A Cと中国合同隊は、ナムチャ・バルワに初登頂した。スロヴェニア隊は、メンルンツェをアルパイン・スタイルで初登頂した。H A J隊は、初登頂を目指してクラウンにトライしたが雪崩のため一人が死亡し登頂を断念した。H A J隊は、シンチンの初登頂に成功した。広島山の会隊は、スークーニャンの南壁から初登攀に成功した。

－ 1993年 －

ポーランドのヴィエリツキは、シシャパンマの南西壁を初登攀。スペインとフランスの3人がランタン谷の科尔から越境してシシャパンマの南西壁を登攀。立教大学隊は、チョモ・レンゾを中国側から初登攀。韓国隊は、チョモランマ北稜から登頂後ネパール側に縦断した。J A C東海隊は、クラウンに初登頂した。

[1994年－1998年]

－ 1994年 －

山野井泰史は、チャー・オユー南西壁を単独アルパイン・スタイルで初登攀。山野井妙子と遠藤由加の女性ペアもアルパイン・スタイルで、チャー・オユー南西壁から登頂。H A J隊は、ルンボ・カ

ンリにトライしたが登頂を断念。長野県山岳協会隊は、チャチャチョにトライしたが登頂を断念。オーストラリア隊は、スペンダーに初登頂。岐阜大学隊は、チリンに初登頂し、チャン・トクⅡにも初登頂した。瀬戸内労山隊は、カシカールに初登頂。H A J隊は、ミニヤ・コンカに東面からトライしたが4人が雪崩のため行方不明となり登頂を断念した。

－ 1995年 －

日本大学隊は、チョモランマ北東稜を完登した。J A C隊は、マカルー東稜下部を初登攀し、上部はノーマル・ルートに登った。栃木県高体連隊は、ニンチン・カンサ西面から初登攀。中津川労山隊は、ニエンチェンタラ南東峰に初登頂。J A C青年部隊は、ムスターグ・アタの南の無名峰に初登頂。山形県山岳連盟隊は、崑崙のギシリク・タークに初登頂。

－ 1996年 －

長野県山岳協会と中国合同登山隊は、チョモラーリを中国側から初登攀した。韓国と中国合同登山隊は、チョム・カンリとルンボ・カンリの二つの七千メートル峰に連続初登頂した。労山隊は、ハン・ヤイリクに初登頂。京都大学と中国合同登山隊は、メーリー・シュエシャンをトライしたが登頂を断念した。

－ 1997年 －

山野井泰史らは、ガウリサンカール東壁と北稜にトライしたが登頂を断念した。H A Jと中国合同登山隊は、クーラ・カンリⅡにトライしたが登頂を断念した。労山隊は、リスムに初登頂した。中央大学隊は、チョム・カンリの第二登に成功した。札幌山岳会隊は、ミニヤ・コンカ東面から北西稜経由で登頂した。

－ 1998年 －

J A C福岡隊は、ナムナニに西面から登頂した。愛媛大学隊は、カンペンチン主峰の第二登を行い、北峰の初登頂に成功した。H A J隊は、ニンチン・カンサ西稜の初登攀に成功した。京都府山岳連盟隊は、ラブチェ・カン無名峰にトライしたが登頂を断念した。J A C隊はガンカル・プンスムを偵察。H A J隊はカバンを偵察。同志社大学隊は、ロンライ・カンリにトライしたが雪崩のため登頂

を断念した。立教大学隊は、ガッシャーブルムⅡを偵察した。H A J隊は、ラモ・シェをトライし

たが登頂は断念した。

中国隊の登山小史

中国における近代登山の幕開けは、1954年にムスターグ・アタを合同で登山したいという、旧ソビエトからの働きかけによりスタートした。

これを受けて、翌1955年に中国としては初めての登山隊員（許競ら4人）をグルジアの登山学校に派遣し訓練を受けた後、パミール団結峰（6,673m）オクチャブル（十月峰・6,780m）に登頂した。

1956年には、旧ソビエトから2人のコーチが派遣されて、太白山（3,767m）に31人が登頂した。この中から24人が旧ソビエトのコーカサスに派遣され、史占春ら12名がエルブルース（5,671m）の登頂に成功した。そして、予定どおり旧ソビエトとの合同ムスターグ・アタ（7,546m）登山が実施され、7月31日に12名が登頂に成功したのであった。これは、中国人による初の7千メートル登頂の記録である。勢いに乗った中国側は、この内の数名がコングール・チュビエ（7,595m）に向かい、陳栄昌ら2人が登頂したのである。

1957年は、中国人だけによる登山を実施した。山は四川省のミニヤ・コンカ（7,556m）であった。6月13日に史占春ら6人が西面から登頂に成功したものの、下山中に3人が滑落死亡した。

1958年は、旧ソビエトとの合同チョモランマ登山の訓練のため、甘粛省の鏡鉄山（5,100m）、七一氷川峰（5,120m）などを登りその後、パミールに登山隊が派遣され17人がレーニン（7,134m）に登頂した。この隊には登頂は出来なかったものの初めて女性の参加3人が6,900mまで達している。また秋には青海省の疏勒山（6,305m）に13人が登頂した。

1959年は、チョモランマ偵察のため物資をBCに集結し、旧ソビエト側の到着を待つばかりとなっていたが、チベット動乱が勃発したため中止となった。そこで、中国人だけで再度ムスターグ・アタに向かい、女性8人を含む32人が登頂したのである。これに先立ち冬には、ニェンチェンタンラにて合宿し、6,177mに72人が登頂した。また、太

白山に女性12人を含む46人が登っている。

1960年である。5月25日未明にチョモランマ北稜から王富州、屈銀華、貢布の3人が登頂に成功したが、第二ステップを越える時、あまりの厳しさに靴を脱いで登攀した屈銀華の事が、「裸足で登攀」とか「夜中の登攀」として、報じられたためその信ぴょう性が疑われたのである。国家の威信をかけたこの登山は250人の大部隊であった。この年には、北京地質学院によって、アムネマツンⅡ（6,268m）が初登頂された。

1961年には、コングール・チュビエにサポートされた女性の登山隊を派遣し、バンドゥラ女性2人と男性3人が登頂したが、下山中に女性のシーラオら5人が雪崩のため死亡した。

1964年には、世界最後の8千メートル峰、シシャパンマ（8,027m）が、許競ら10人によって初登頂された。1961年に旧ソビエトに招待された史占春ら4人は、旧ソビエトの登山家達が、世界最後の8千メートル峰であるシシャパンマに登山していることを感じたが、旧ソビエトからはその後何等の提案もなかったということである。玉竜雪山（5,596m）もこの年に初登頂されたことになっているが、その後の登山隊の活動からみて、これは連峰の一つだったようである。

これ以降は、文化大革命の嵐が全国的に吹き巻き、登山隊員もそれぞれの立場で過さざるを得なかった時期が続いた。

1975年、再開された登山活動の第一歩は、当時も疑問視されていたチョモランマの再登であった。5月27日に9人が登頂し、（内バンドゥラがネパール側から登頂した田部井淳子に次いで、女性第二登となった）頂上に測量用のポールを建てたのは有名である。

1977年、旧ソビエトとの国境にある天山のトムール（7,439m）に7月25日11人、続いて30日にも17人が登頂した。この時期は旧ソビエトとの関係は冷却しており、この登山も国境問題が絡んでいたと云われる。

これ以降は、1980年に中国の山が外国人へ開放されたのに伴い、登山経験のある登山隊員達は、外国隊の受け入れ、現地への同行（連絡官）など、サポート的な任務に付くようになったのは周知のとおりである。

1983年と84年には、中国登山界の総力を上げて、未踏の王者ナムチャ・バルワ（7,782m）登山が実施されたが、両年ともナイプン（7,043m）に登頂したに留まり、ナムチャ・バルワは未踏のまま残ることとなった。

1985年にはチベット自治区成立20周年を記念して、チベット自治区からチョー・オユーに登山隊が派遣され9人が登頂した。また、京都大学、同志社大学と合同によりナムナニ（7,694m）の初登頂、アメリカ隊との合同でウルグ・ムスターグ（6,973m）初登頂、H A J女性隊と合同による八花氷山（5,850m）の初登頂もあった。

1986年にチベット登山協会隊は、ニンチンカンサ（7,206m）の初登頂に成功。また、H A Jと合同でシュエバオ・ディン（5,588m）の初登頂、長野県山協と合同でチャンツェ（7,553m）の登頂に成功している。

1987年にはH A Jと合同で、チベットのラプチュ・カン（7,367m）の初登頂に成功した。

1988年は日本、ネパールと三国合同登山をチョモランマで実施し縦断に成功した。また神戸大学と合同でチュルー（6,168m）の初登頂にも成功した。また、アメリカと合同で南極のビンソンマシフの登頂を行っている。

1989年は香港と合同でチャンツェに登頂している。

1990年アメリカ、旧ソ連との三国合同でチョモランマに登頂した。登頂者の中には女性のグイサン（チベット族）も含まれている。また、京都大学隊に参加してシシャパンマ中央峰（8,008m）の登頂に成功した佟璐は、漢族の女性として初めての8千メートル峰登頂者となった。更に長野県山岳協会と合同でザルンセル・カンリ（6,460m）の初登頂に成功している。

1991年には、前年の12月から京都大学と合同で梅里雪山（6,470m）に登山したチームが日本11人、中国6人が雪崩のため行方不明となった。ま

た、J A Cと合同でナムチャ・バルワに挑んだが登頂に失敗した。

1992年は、前年に引き続きJ A Cと合同で実施したナムチャ・バルワの初登頂に成功した。また、一般市民による高峰登山もポツポツと始まり、91年92年とムスターグ・アタには西安から来た3人が登頂を試みたり、北京大学隊も独自に活動した。

1993年に入るとチベット登山隊では、台湾と合同でチョモランマ登山を実施し、その後12人をネパールに派遣し、ダウラギリ I、アンナプルナ Iに登頂した。

1998年には、北京大学隊がチョー・オユーの登頂に成功し、清華大学隊もチャンツェに挑戦している。

なお、チベット登山隊が、1993年から8千メートル峰14座登頂計画を進めているが、登頂に成功した山と登頂者は以下の通りである。

1. 1993年春、アンナプルナ I

次仁多吉、仁那、辺巴扎西、阿克布

2. 1993年春、ダウラギリ I

次仁多吉、仁那、辺巴扎西、阿克布、達穷、旺加、加布、大斉米、洛則

3. 1994年春、シシャパンマ

次仁多吉、仁那、辺巴扎西、阿克布、達穷、旺加、加布、大斉米、洛則

4. 1994年秋、チョー・オユー

次仁多吉、仁那、辺巴扎西、阿克布、達穷、旺加、加布、大斉米、洛則

5. 1995年夏、ガッシャーブルム II

次仁多吉、仁那、辺巴扎西、阿克布、達穷、旺加、加布、洛則

6. 1996年春、マナスル

次仁多吉、仁那、辺巴扎西、阿克布、達穷、旺加、加布、洛則

7. 1997年夏、ナンガ・パルバット

次仁多吉、仁那、辺巴扎西、阿克布、加布、洛則

8. 1998年春、カンチェンジュンガ

次仁多吉、仁那、阿克布、達穷、加布

9. 1998年秋、ローツェ

次仁多吉、仁那、辺巴扎西、達穷、洛則

中国高峰の概要と登山小史

★ 広大な国土に散らばる中国の高峰群を、ここでは便宜的に以下の七つに区分して紹介する。

- I) 中央ヒマラヤ：主にネパール、ブータン、インドと国境を接している地域。
- II) カラコルム：主にパキスタンと国境を接する地域。
- III) パミールと天山
- IV) コンロン
- V) ガディセイ山脈とニエンチェンタンラ山脈。
- VI) グレート・ベンドとマクマホン・ライン：ヤル・ツェンボ江大湾曲部周辺とマクマホン・ライン地域。
- VII) 横断山脈：四川省から雲南省に連なる地域。

I. 中央ヒマラヤ

地球上の最も高い山々が立ち並び、世界の岳人はもとより、大自然を愛する全ての人々が憧れてやまない場所であり、ヒマラヤのハイライトである。そこは「神々の座」とも異称される。

アプローチ・マーチは、ヒマラヤ山脈の北に位置するチベット高原であり、この高原を利用して山懐深くまでジープなどの車を使えるため、ラサからベース・キャンプまでの入山は、南のネパール側などに比べると驚くほど楽であり、また、短時間に到達できる。

さらに、ラサを経由しなくとも、ネパールから直接入山することが可能であり、このため、チョモランマ、チョー・オユー、シシャパンマなどの八千メートル峰は、賑わいをみせており、時には登山隊がひしめきあって無用のトラブルも発生している。

しかし、七千メートル峰に目を転ずれば、クラ・カンリ、ナムナニを筆頭に静かな環境の中で登山できる山々が数多くある。

I-1) チョモランマ (8,848m)

第三の極地・世界最高峰は、いつの時代にも話題にこと欠かない。1980年に外国隊に開放されてから、JAC隊が北西壁下部新ルートを開拓してから、ありとあらゆるルートが開拓され、イベン

トが催された。しかし、中国側からのチョモランマの「秋」の登頂率は非常に低い。冬にいたっては、80年代半ばにカモシカ同人とウータンクラブによって数回挑戦されただけである。

1980年8月メスナーが北稜から単独登頂。85年8月ロレタンとトロワイエが北西壁ホーバイシルート経路で登頂し、BCまで44時間で往復した。88年には、中国、ネパール、日本の三国合同隊が南と北からそれぞれ縦断した。日本人では、山田昇が北から南へ縦断。この模様は頂上から日本のお茶の間に同時放映された。

82年秋、北にあるチャンツェ(7,553m)をドイツ隊が初登頂した。

I-2) マカルー (8,463m)

95年春、JAC隊が東稜から初トライしたが、下部のトレースに終わり、上部は手つかずで未踏のまま残った。登頂には成功した。

93年秋、チョモレンゾ(7,816m)を立教大学隊が中国側から初登攀した。

I-3) チョー・オユー (8,201m)

87年に開放される前から、ネパール政府の登山許可を得て、中国に不法に越境して西北西稜を登る登山隊が絶えなかった。87年秋、カモシカ同人隊が正式許可として初めて登頂。頂上から高橋和之がパラパント降下に成功した。現在では地球上で最も登り易い八千メートル峰との評が定着している。

86年秋、チョー・アウイ(7,354m)をHAJ隊が初登頂。89年春、スークァン・リ(7,308m)を大阪市立大学隊が初登頂した。

I-4) シシャパンマ (8,027m)

下部に長い氷河を抱えている割には、登山者が絶えず、チョー・オユーとの連続登頂を目指す登山者の好餌となっている。但し、従来主峰の標高は、8,012mであった。その標高でいくと北東稜が派生する頂点(中央峰)の標高は、7,999mであったが、いつの時点からか中国製の5万分の1の地図上にある主峰8,027m、中央峰8,008mが一人歩

きし、今では北東稜を登って主峰に登る登山者は少なく、中央峰に登頂することが多い。しかし、中央峰を八千メートル峰とすることには、パキスタン側ブロード・ピーク「前峰」と主峰の関連から疑問視する向きも多い。

80年春、ドイツ隊が第二登。81年春、女子登攀クラブ隊が第四登した。

81年春、モラメンチン(7,703m)をニュージーランド隊が初登頂。82年春、ポーロン・リ(7,292m)を大分県山岳連盟隊が初登頂。同年春、南面のブンバ・リ(7,447m)、87年夏、西面のエポカンジャロ・リ(7,365m)、89年秋、南のヤナン・リ(7,071m)が初登頂された。97年春、西面のリスム(7,050m)を労山隊が初登頂した。

81年秋、ランタン・リ(7,205m)を京都大学隊が偵察した。

I-5) ナムナニ (7,694m)

85年春、京都大学、同志社大学の日本側と中国の合同登山隊が初登頂した。90年、スイスの4人が第二登。98年春、JAC福岡隊が第三登に成功。いずれも西面氷河からのルート。

I-6) クーラ・カンリ (7,538m)

86年春、神戸大学隊がI峰西稜から初登頂した。97年春、HAJとチベット登山協会の合同隊が、II峰(7,418m)に入山したが、6,350mで断念。

86年秋、隣接するカルジャン(7,216m)をHAJ隊が初登頂したが、南のピークは断念した。

98年秋、ブータン側からはガンカル・プンスム(7,570m)として著名な山にJAC隊が偵察として入山。99年春に本隊を送る予定。

この他、クーラ・カンリ周辺では、II峰、III峰(7,381m)、カルジャン中央峰(7,018m)、ゴウラカ・リ(6,497m)、ターラ・リ(6,777m)が未踏である。

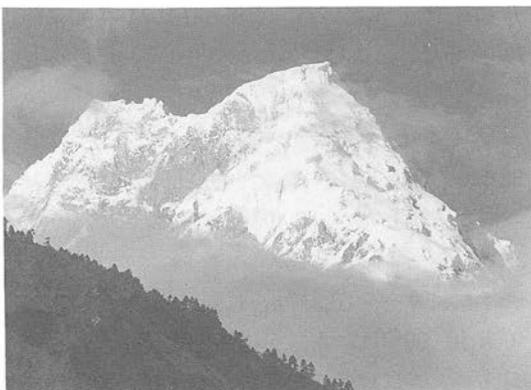
I-7) ヤンラ・カンリ (7,429m)

96年秋、HAJとチベット登山協会の合同隊が南面に偵察として入山。98年秋HAJ隊が北面を偵察。ネパール側では、ガネッシュ・ヒマールIとして知られている山であるが、第二登を許していない魅力的な山である。

I-8) ラプチュ・カン (7,367m)

87年秋、HAJとチベット登山協会の合同登山

▼グレート・ベンド、ギャラ・ペリ (7,294m)



隊が西稜から初登頂した。

95年春、主峰の西側にある7,072m峰をスイス隊が初登頂。98年秋、主峰の東側にある7,100m峰に京都府山岳連盟隊が入山するも6,700mで断念した。

92年秋、メンルンツェ(7,175m)をスロヴェニア隊の二人がアルパイン・スタイルで初登頂した。

97年秋、ガウリサンカール(7,134m)の北面、東面を山野井泰史がトライするも、6,300mで断念。

I-9) チョモラーリ (7,326m)

96年秋、長野県山岳協会と中国の合同登山隊によって中国側から初めて登頂された。近くにはブータン側では、ジチュ・ダケと呼ばれるタンガヨウラ(6,809m)がある。また、ブータン国境の北側には西から東に中国でトンシャンジャブー(7,207m)、ブータン名カンブー・カン(7,204m)、ブータン名ゾンゴブー・カン(7,034m)など未踏の七千メートル峰がある。

I-10) カンペンチン (7,299m)

82年春、京都大学隊が東面氷河から初登頂した。98年夏、愛媛大学隊が主峰の第二登を行い、北峰(7,230m)を初登頂した。

85年春、ララガ・リ(6,671m)に岩手医科大学隊が入山したが6,400mで断念。

カンペンチンを主峰とするペグ・ヒマールには、六千メートル峰の未踏峰が林立しており、短期間でヒマラヤを楽しむことが可能である。

I-12) バイリとダモダール

ネパールで云うペリ・ヒマールからダモダール・ヒマールの中国側には、七千メートル峰こそラト

ナ・チュリ(7,035m・95年ネパール側から信州大学が初登頂)しかないが、立派な山容の6,899m峰、6,730m峰などの未踏峰やブリクティ・サイル(6,364m)などがある。

I-13) ヤル・ツァンポー源流の山々

98年夏、ロンライ・カンリ(6,859m)に同志社大学隊が入山したが、6,400mで断念。

I-14) ジーロン谷の山々

98年秋、カバン(6,717m)にH A J隊が偵察として入山。99年秋に本隊を送る予定。

ジーロン谷には、この他にネパールとの国境にあるランプー・カンリ(6,668m)、プヨン(6,676m)、ジーロン県裏に聳えるチョグラ・リ(6,514m)など魅力的な山が未踏のまま眠っている。

II. カラコルム

中央ヒマラヤへのアプローチ・マーチが「高原」であるのに対して、カラコルムへのそれは「重畳と連なる山脈と大河」である。カラコルムへ接近するためにはラクダに頼らざるを得ない。

II-1) チョゴリ (8,611m)

82年夏、JMA隊が北稜から初登攀した。83年イタリア、90年アメリカ、94年スペインも同ルートから登頂。90年夏、横浜山岳協会隊が下部北西壁から上部JMAルートに抜ける新ルートを開拓。

II-2) ガッシャーブルム I (8,068m)

89年春、横浜山岳協会隊が偵察に入山。同年夏、宮城県山岳連盟隊が東稜をトライしたが、6,400mで断念した。

II-3) ブロード・ピーク (8,051m)

90年から3年続けてイタリア母体とする隊がトライし、92年夏中央峰(8,008m)の初登攀に成功。

II-4) ガッシャーブルム II (8,035m)

98年春、立教大学隊が偵察に入山。99年本隊を送る予定。

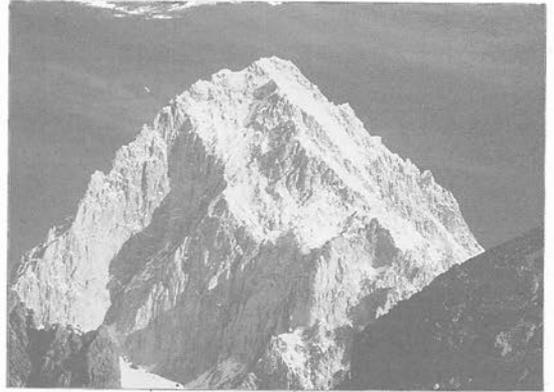
II-5) クラウン (7,295m)

85年、90年、92年と秋にH A J隊が東壁をトライしたが、7,000mで断念。87年夏、静岡大学隊も東壁7,000mで断念。同年夏、イギリス隊も7,000mで断念。93年夏、JAC東海隊が東壁を直登して初登頂に成功した。

II-6) チリン (チャント・ク I 7,038m)

94年夏、岐阜大学隊が北東稜から初登頂に成功。

▼カラコルム、クラウン (7,295m)



隣接するチャン・トク II (6,972m)にも初登頂した。

II-7) スペンダー (7,315m)

チョゴリの西10kmにあり、5つのピークがある。94年夏、オーストラリアとニュージーランドの合同隊がサルボ・ラッグ氷河から7,220mピークに初登頂し主峰の初登頂も成し遂げた。

II-8) その他

シャクスガム上流のパキスタンとの国境にある7,000m峰が、ほとんど手つかずのままである。

III. パミールと天山

中国領パミールは、パミールの最高峰であるコングールを筆頭に、七千メートル峰三山が至近距離に立ち並ぶ。特にムスターグ・アタは高さの割には、登山が比較的容易であり、地形的にスキーに適していることも手伝って、中国でも圧倒的に人気がある。また、登山と組み合わせてカラコルムを通過する国境越えも盛んである。

シルクロードを南北に分ける天山山脈の半分が中国領である。キルギスとの国境にあるこの山脈の最高峰トムールは、キルギス側ではポベダと呼ばれている。天山にはもう一つ七千メートル峰がある。ハン・テングリである。標高は、6,995mであったが、旧ソ連時代の89年にこの山が外国人に開放された際に、7,010mと改訂され、七千メートル峰に格上げされた。しかし、93年に中国で出版された「中国登山指南」では、相変わらず6,995mである。また中国とキルギスとの国境線がどのように引かれているのか定かではないが、地形を見る限り中国側からこの山にトライするのは困難であるように思われる。

Ⅲ-1) コンゲール主峰 (7,649m)

81年夏、コンゲール主峰をイギリス隊が南面から初登頂した。同年、時期をずらして北面から登攀した京都カラコルムクラブ隊は、北稜にアルパイン・スタイルで挑んだ3人が行方不明となり断念。89年夏、同クラブが北稜に再度挑み第二登に成功し雪辱を果たした。

81年夏、コンゲール・チュピエ(7,530m)に防衛大学隊が南稜から第三登に成功。89年夏の宮崎県山岳連盟隊は、6,510mで断念した。

コクセル・コルを挟んでコンゲールの南にあるコクセル(6,705m)は、93年夏、山形大学隊が初登頂。95年夏、カジセル(6,525m)を立川女子高校隊が初登頂。80年夏、サリヤチ(6,220m)をイギリス隊が初登頂した。

87年夏、チャクラギール(6,727m)を明治学院大学隊が初登頂した。95年夏、福岡隊は落石のため遭難者が出たため断念した。

Ⅲ-2) ムスターグ・アタ (7,546m)

80年夏、開放第一陣として入山したアメリカ隊が登頂してスキー滑降を行う。81年夏、コンゲールに向かう前に、京都隊が登頂。以後、入山するほとんどの隊が西稜から登頂しているが、頂上部分がゆるやかで広大なこともあって、頂上手前でも「登頂」と報告する隊も多い。

81年夏、北峰(7,184m)を川崎教員隊が初登頂。

95年夏、南面の無名峰(6,849m)をJAC青年部隊が初登頂した。

Ⅲ-3) トムール (7,435m)

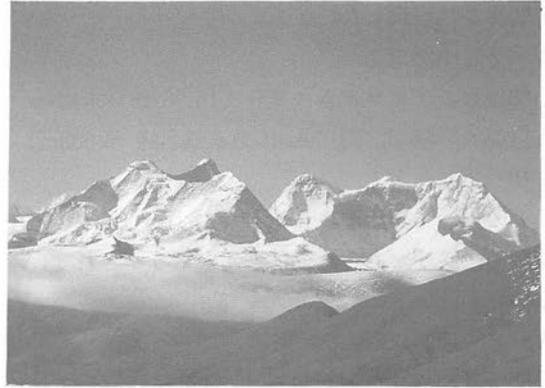
77年夏、中国隊は大学してトムールに入山。28人が登頂した。86年夏、女子登攀クラブ隊がトライするも雪崩のため6,200mで断念。90年夏、横浜市立大学隊は雪崩遭難のため6,450mで断念。92年夏、同隊の関係者で作る天山倶楽部隊は雪崩のため5,800mで断念。まだ中国側からの第二登はない。

90年夏、北東66kmにあるシュエレン(6,627m)にJAC東海支部隊が初登頂。3度目の挑戦であった。

94年夏、南17kmにあるカシカール(6,342m)に瀬戸内天山隊が初登頂した。

トムール周辺には、この他にも多数の六千メー

▼中央ヒマラヤ、カルジャン(左)、クーラ・カンリ(右)



トル峰があり未踏を保っている。この地域はアプローチ・マーチにおける河の処理が難点である。

Ⅲ-4) ボゴダ (5,445m)

48年、シプトンとティルマンによって5,000mまで登られた。開放後の81年夏、京都山岳会隊が初登頂に成功した。周辺には数座の5,000m峰があり、80年代に日本から数多くの登山隊が入山し、ほとんどの峰の初登頂を行った。

IV. 崑崙

東西2,500kmの長さをもち地球上で一番古いと云われる山脈である。東に行くほど高度を下げる。崑崙は、天山、アルタイ、パミールなどと並んで、シルクロードのイメージと重なっており、日本人には馴染みの深い場所である。一般的には、西部、中部、東部に区分されている。

IV-1) 西部崑崙

85年夏、HAJの女性隊が中国と合同でムーシュ・ムスターグ(6,638m)にトライしたが、周辺の5,850m峰に初登頂し八花氷山と命名した。そのムーシュ・ムスターグは、90年夏、栃木県高体連隊によって初登頂された。

89年夏、ムーシュ・ムスターグの南にあるチョルパンリク・ムスターグ(6,524m)を仙台一高隊が初登頂した。

86年夏、崑崙の最高峰でありかつ唯一の七千メートル峰である無名峰(7,167m)に東京農業大学隊が初登頂した。同峰には、97年夏、西陣山岳隊が第二登。

87年夏、ホータンの東南東218kmにあるカシタシ(6,697m)に福岡隊が入山するも5,970mで断念。

95年夏、ホータンの南東200kmにあるクタイケ

リケ(ギシリク・ターク 6,488m)に山形県山岳連盟隊が初登頂した。

IV-2) 中部崑崙

88年夏、チオン・ムスターグ(6,962m)に向かった京都大学隊が、西100kmにある無名峰(6,903m)に初登頂した。

その他、この周辺には阿克塔格(6,748m)など無数の未踏峰があるが、ほとんどトライされていない。

IV-3) 東部崑崙

85年夏、ウルグ・ムスターグ(6,973m)をアメリカと中国の合同登山隊が初登頂。89年夏、立正大学と中国の合同登山隊が第二登。

88年春、シンチン(6,860m)にH A J隊が入山。18峰(6,237m)に初登頂。同時期アメリカ隊も入山。89年春、京都山岳会隊が入山するも6,170mで断念。92年春、H A J隊によって主峰が初登頂された。

81年春、かつては、エヴレストより高いのではないかと話題になった、アムネマチンI(6,282m)を上越山岳協会隊が初登頂した。同年夏にも数隊が登頂。84年夏、日中合同隊がII峰(6,268m)に登頂。同年夏、V峰(6,090m)を武漢地質学院隊が初登頂。93年夏、I峰を山梨県山岳連盟隊が東稜から初登攀した。

85年夏、コンロン山口の東にあるユイチュ(カカサイジモンカ 6,179m)を日本山岳会隊が北面から登頂。90年夏、北京大学隊が南面から登頂。93年と94年夏、H A J隊も南面から登頂。

94年夏、峠の西にあるユイシュ(5,933m)をH A Jと中国合同女性隊が登頂した。

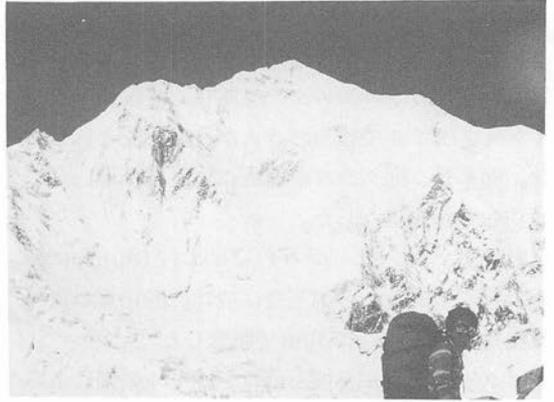
キレン山群の最高峰スーチューリアン(5,547m)には、85年夏、J A C隊が初登頂した。また、アルチン山群の最高峰には89年夏、秋田市と中国の合同隊が初登頂した。

その他、黄河源流域のヤラダツォ(5,215m)、バヤンカラ(5,267m)を1985年春にH A J隊が登頂。崑崙山脈東端のニエンバオイエツェ(5,369m)にも1989年夏、京都山の会が入山した。

V. ガディセイ山脈とニエンチェンタンラ山脈

西はパンゴン湖から東はギャラ・ペリの北まで、チベット高原の青藏高原の南縁に連なるこの2つ

▼横断山脈、ミニヤ・コンカ(7,556m)



の山脈は、ヘディンによってトランス・ヒマラヤと呼ばれた。7,000mを超える山は4座と少ないが、特に青蔵公路の東に広がるニエンチェンタンラ山脈東部は、今後注目される場所となるだろう。

V-1) ルンボ・カンリ(7,095m)

94年春、H A J隊が初めてトライし2ルートを試登した。96年秋、韓国と中国の合同登山隊によって初登頂された。

カン・リンボチュ(6,638m)は、聖山カイラスとして有名であり登山許可を取得するのは困難であろう。しかし、登頂ルートは南東面にあり、技術的には大きな問題はない。むしろ登山としての興味は、西面の岩壁や、南北両面の氷雪壁にある。カン・リンボチュの北には、かつて(7,315m)の標高を与えられていたアリン・カンリ(6,598m)がある。

V-2) ニエンチェンタンラ(7,162m)

59年冬、中国隊は6,177m峰で合宿を行い大量登頂した。

86年春、東北大学隊によって主峰が初登頂された。89年夏、中央峰(7,117m)がオーストリア隊によって初登頂され、92年夏北京大学隊が第二登。95年夏、南東峰(7,046m)が中津川労山隊によって初登頂された。

92年夏、サンデンカンサ(6,590m)が川上/松永隊によって初登頂された。95年夏、北東にあるタンランボ(6,394m)を中央大学隊が初登頂。周辺には無数の6,000m峰がある。

V-3) チョム・カンリ(7,048m)

ヤンパーチンの南西にある。96年秋、韓国と中国の合同隊が南面から初登頂。97年春、中央大学

隊が同ルートから第二登した。

V-4) ニェンチェンタンラ東部

青蔵公路の東側に広がる大山群。アルプス的な山々が立ち並ぶ景観を成都～ラサ間の機上から見ることができる。

94年と96年にチャチャチョ(6,447m)に長野隊が入山したが登頂は断念した。

97年春、セブ・カンリ(6,956m)にボニントン隊が入山したが5,500mで断念した。

以上二つの山の周辺には、6,500mを超える未踏峰が林立していて、未踏峰の宝庫である。

V-5) ニンチン・カンサ(7,206m)

85年秋、大分県山岳連盟隊が主峰を目指したが6,800mで断念。トゥゴロン(6,763m)に初登頂した。

86年春、チベット登山協会隊が南面から主峰の初登頂に成功。92年春、自衛隊山岳連盟隊が南面から第二登。95年夏、栃木県高連隊が西面から初登攀。同時期福岡大学と北京大学合同隊が南面から登頂。97年夏、H A J隊が栃木ルートから登頂。98年夏、H A J隊が西稜初登攀。

97年春、ジェットンソン(6,249m)に長野県山岳協会隊が入山したが、5,800mで登頂を断念。

VI. グレート・ベンドとマクマホン・ライン

かつて「アッサム・ヒマラヤ」と呼ばれていた地域とほぼ同じ。ラサの遥か東、リンチャミーリンの東を流れるヤル・ツァンボ江沿いは、深い樹林に覆われて、中央ヒマラヤとは一味も二味も異なった独特の地域を造っている。ここがグレート・ベンドである。また、中国とインドの係争の地マクマホン・ラインにも高峰が立ち並ぶ。その景観は成都から乗った飛行機がラサに着く直前に機上から見ることができる。

VI-1) ナムチャ・バルワ(7,782m)

83年春、中国隊がナイブン(7,043m)に初登頂。84年春、同様に中国隊はナイブンに登頂。91年秋、J A Cと中国の合同登山隊がナイブン・ルートから7,460mまで到達したが、雪崩遭難などで断念。92年秋、J A Cと中国合同登山隊は前年同様ナイブン・ルートから初登頂に成功。

ナムチャ・バルワの北東にはサンルン(7,095m)があり、アブローチの輸送が鍵を握っている。

▼横断山脈、シャラ・リ(6,032m)



また、サンルンからさらに東には、カンリ・ガルポ山群があり、主峰のルォニ(6,610m)をはじめ小振りながら興味深い山々がある。

VI-2) ギャラ・ベリ(7,294m)

86年秋、H A J隊が南稜から初登頂に成功。北西4kmにセンダン・プー(6,812m)、西10kmにはランメンバザラ(6,846m)がある。二座とも堂々とした山姿である。

VI-3) カント(7,055m)

88年秋、同志社大学隊が北峰(7,037m)を經由して主峰の初登頂に成功した。主峰の北東10kmにチョモ(6,890m)、さらに東にはニェギェ・カンサンと呼ばれているトゥイ・カンリ(6,990m)がある。

カントの南西10kmにはゴリ・チェン(6,490m)、ラサの南東80kmに聖山ヤルラ・シャンボ(6,635m)があるが未だ手つかずである。

VII. 横断山脈

四川省西部とチベット自治区東部を北から南に貫くいくつもの山脈から成り、いずれも森林帯に直結している。

VII-1) ミニヤ・コンカ(7,556m)

戦前の32年秋、アメリカ隊が北西稜から初登頂。57年秋、中国隊が同ルートから第二登、開放後の81年春、北海道山岳連盟隊が東面から頂上直下まで迫ったが8人が遭難して断念。82年春、市川山岳会隊が東面の異なる氷河から頂上直下まで迫るも2人が遭難したがその内の1人は生還した。82年にスイス隊、アメリカ隊が西面から登頂。90年春、北海道隊が東面北西稜の6,400mで断念。91年秋、H A J隊が東面ハイローコー氷河から北東

稜6,400mで断念。94年秋、H A J隊はヤンズーコー氷河から北東支稜の6,050mまで達したが、4人が雪崩と思われる遭難で断念。97年春、札幌山岳会隊が東面北西稜から登頂に成功した。

81年春、スイス隊は東面に入り、ソイヤツェン(6,686m)、タイシャン(6,410m)、6,652m峰など6座に初登頂した。

81年春、ジャズ(6,540m)にイギリス隊がトライしたが断念。82年秋、アメリカ隊が初登頂に成功。

95年秋、ラモ・シェ(6,070m)にアメリカ隊が初登頂。98年夏、H A J隊が入山したが5,800mまで。

VII-2) 大雪山系

88年春、リタンの西南西67kmのゲニ(6,204m)にH A J隊が初登頂。86年秋、金沙江左岸デゲの近くにあるチェルーシャン(6,168m)に神戸大学と中国の合同登山隊が初登頂。96年夏、山岸/樋上隊は1,111mで断念。91年秋、バタンの東北東17kmのヤンモーロン(6,060m)に日本大学隊がトライするも5,450mで断念。89年夏、リタンの南177kmにあるシャラ・リ(6,032m)にH A J隊が入山したが、5,500mで断念。98年秋、蓮花夕照連山(5,704m)を労山隊が初登頂。

VII-3) スークニャン (6,250m)

81年夏、同志社大学隊が南東面から初登頂。81年秋、83年秋、アメリカ隊、H A J隊が北壁を試登。91年夏、拓殖大学隊が南東面5,630mで断念。92年夏、広島山の会隊が南壁から初登攀。

81年秋、東の対岸にある岩峰ブニュー(5,413m)をアメリカ隊が初登頂。

VII-4) シュエバオ・ディン (5,588m)

86年夏、H A Jと中国の合同登山隊が初登頂。

90年夏、さがみ家族山の会、91年夏、H A J隊も同ルートから登頂。91年夏、シャオ・シュエバオ・ディン(5,026m)をさがみ家族山の会が初登頂。

91年夏、ヤンゴンシャン(5,273m)をJ A C 攻城隊が初登頂。

VII-5) メーリー・シュエシャン (6,740m)

87年秋、上越山岳協会隊が4,940mまで。88年春、アメリカ隊が5,000mまで。89年秋、京都大学と中国の合同登山隊が5,400mまで。90年冬、京都大学と中国の合同登山隊が6,470mに達したが、その後雪崩のため17人が遭難し断念。96年秋、京都大学と中国の合同登山隊が1,111mに達したが断念。

92年秋、アメリカ隊が、メーリー・シュエシャンの北にある6,509m峰をトライした。

VII-6) ユイロン・シュエシャン (5,596m)

84年春、H A J隊が北東稜からトライしたが、5,100mまでで断念。86年春、アメリカ隊が北東稜コル上で断念。87年春、アメリカ隊が東面から初登頂に成功した。

[おわりに]

広大な中国大陸の中にある高峰は、おかれている位置により随分と山岳の気象条件が異なる。そして、あまり登山者を迎えていない地域では、気象に関する情報は圧倒的に少ない。高峰登山は、気象条件によって極度に左右されることが多いことを考えると、中国内における高峰登山を計画する場合には、気象の情報収集や研究にウエイトをおく必要がありそうである。尤も、メーリー・シュエシャンのケースのように、大自然は、その道の専門家が現地にてさえも、予測できないような巨大な破壊力を秘めていることをも頭に入れておく必要はある。

H A J チベット 2 座連続登山隊 T シャツ販売

H A J では、今年の秋にチベットのジーロン地域にある「カバン(6,717m未踏峰)」と西の王者「ナムナニ(7,694m)」の2座を連続登頂する計画で登山隊を派遣します。

この登山を記念して、ユニークなロゴ入りのTシャツを同隊が作成しました。ダクロン製で速乾性と吸水性に富み、汗に濡れた肌にもベタつくこ

となく、爽やかな気分を持続させます。

同隊の支援を兼ねてH A J では、このTシャツを販売いたします。希望される方は色とサイズを記入してH A J までお申し込み下さい。

色：ブルーグレー、イエロー、グレー

サイズ：LとM

価格：1枚3000円 送料 1枚=240円 3枚まで=390円

中国登山・日本隊20年の記録集計表

(1999年・1月11日：山森欣一作成)

(注) 左：隊数、右：人数、()内は死亡。

	年	8,000m峰	7,000m峰	6,000m峰	5,000m峰	合計
01	1979	1 9				1 9
02	1980	3 43 (1-1)	2 13			5 56 (1-1)
03	1981	3 16	6 74 (2-11)	4 43	5 70 (1-1)	18 203 (3-12)
04	1982	3 57 (1-2)	5 44 (3-3)		2 21	10 122 (4-5)
05	1983	1 17		1 2	1 8	3 27
06	1984		2 8	1 12	3 27	6 47
07	1985	2 20 (1-1)	8 51	5 57	5 38	20 166 (1-1)
08	1986	1 1	12 108	1 12	2 26	16 147
09	1987	4 44 (1-1)	4 35	3 30		11 109 (1-1)
10	1988	5 78	2 18	7 52	1 14	15 162
11	1989	4 38	7 65	7 71	3 39	21 213
12	1990	4 63	5 38 (2-5)	4 48	1 5	14 154 (2-5)
13	1991	5 51 (2-3)	6 58 (1-1)	4 33 (1-11)	3 35	18 177 (4-15)
14	1992	4 42 (1-1)	5 47 (1-1)	4 27	2 11	15 127 (2-2)
15	1993	2 15	4 41	4 57		10 113
16	1994	4 28	8 56 (1-4)	4 32	2 19	18 135 (1-4)
17	1995	6 73	4 45	7 81 (1-1)	1 10	18 209 (1-1)
18	1996	6 41 (1-1)	8 46	5 46		19 133 (1-1)
19	1997	6 22	12 87	3 29	3 20	24 158
20	1998	9 39	11 77	5 25	2 29	27 170
合計		73隊 697人 (8-10)	111隊 911人 (10-25)	69隊 657人 (2-12)	36隊 372人 (1-1)	289隊 2637人 (21-48)

- (注) 1. 登山隊に同行した取材班については、規模の大きいものについては1隊として集計した。
 2. 偵察隊は正式許可を取得したものだけを集計した。
 3. 登山隊に同行したトレッキング隊は除外した。

中国山別入山一覧表

(1999年 1月 山森欣一作成)

* 凡例 隊員・登頂・死亡各欄の数字はそれぞれ順に、総数・[中高年者数]・(女性者数)・[女性の中高年者数]である。印欄は ★偵察 ◎初登頂 ○登頂 ●初登攀 ×断念 △その他

チ ョ モ ラ ン マ

* 同行取材班については、BCが4,000m未満(或いは公路沿い)については除外を原則としたが、上部にて活動に参加した者については、その員数だけ別記した。BCが5,000m以上については別記を原則としたが、一部記者だけのケース等については登山隊に含めたものもある。

(偵察は許可を得てBC以上で登山活動したものだけを対象とした)

	年度	季節	ルート	派遣母体名	隊長名		隊員数	登頂者数	死亡者数
1	1979	春	北 稜	日本山岳会	斎藤 惇生	★	9[1](0)	6,800mまで	高所協力員3名
2	1980	春	2ルート	日本山岳会	渡辺 兵力	●	26[4](0)	3[0]	1[0]
3	"			(取材班)			13[2](0)		
4	1983	冬	北西壁	カモシカ同人	高橋 通子	×	171[1]	8,100mまで	
5	1985	秋	北 稜	ウータンクラブ	長谷川恒男	×	11[1](2)[1]	8,200mまで	10[0]
6	"	冬	北西壁	カモシカ同人	高橋 通子	×	91[1]	8,450mまで	
7	1987	秋	西 稜	防衛大学校山岳会	川上 隆	×	26[5](0)	8,100mまで	1[1]
8	"			(取材班)			4[1](0)		雪豹撮影に成功
9	"	冬	北 稜	ウータンクラブ	長谷川恒男	×	41[0]	7,650mまで	
10	1988	春	北 稜	日本山岳会	橋本 清	○	23[6](0)	2[0]	1名は縦断
11	"			(取材班)			42[14](1)[0]	3[2](0)	頂上から中継
12	"	冬	北 稜	ウータンクラブ	長谷川恒男	×	5[2](1)[0]	7,800mまで	
13	1989	秋	北西壁	日本ヒマラヤ協会	尾形 好雄	×	9[3](0)	8,200mまで	
14	1991	春	北 稜	貫田/二上	貫田 宗男	○	2[1](0)	2[1]	1[1]
15	"	春	北東稜	明治大学	平野 真一	×	10[4](0)	6,400mまで	
16	1992	春	北東稜	日本/カザフ	大宮 求	×	11[3](1)[0]	8,350mまで	10
17	1995	春	北東稜	日本大学	神崎 忠男	●	20[8](0)	2[0]	
18	"			(取材班)			9[2](0)		
19	1996	春	北 稜	福岡市山岳協会	植松 満男	○	15[9](1)[1]	4[2](0)	
20	"	春	北 稜	立正大学	山崎 幸二	○	8[2](0)	2[1]	
21	1997	春	北 稜	亜細亜大学	野口 健	×	41[0]	8,000mまで	
22	"	春	北 稜	F. O. S	戸高 雅史	×	2[0](1)[0]	8,000mまで	
23	"	春	北 稜	国際公募隊	R.ブライス	×	1[0](1)[0]		続素美代
24	1998	春	北 稜	昭和山岳会	小野寺 齊	○	11[7](0)	4[1]	
25	"	春	北 稜	日本勤労者山岳連	近藤 和美	○	12[10](2)[2]	8[6](0)	
26	"	春	北 稜	テレビ朝日	村口 徳行	○	3[1](0)	3[1]	
27	"	春	北 稜	ガイア・アルバイ	小西 浩文	×	10	7,800mまで	
28	"	春	北 稜	F. O. S	戸高 雅史	×	2[0](1)[0]	8,500mまで	
29	"	春	北 稜	国際公募隊	R.ブライス	○	1[0](1)[0]	1[0](1)[0]	
合 計			29隊	310人			310[90](16)[6]	34[14](1)[0]	5[2](0)

チ ョ ブ リ

	年度	季節	ルート	派遣母体名	隊長名		隊員数	登頂者数	死亡者数
1	1981	秋	北 稜	日本山岳協会	小西 政継	★	5[2](0)	5,100mまで	
2	1982	夏	北 稜	日本山岳協会	新貝 勲	●	45[3](0)	7 [0]	2 [0]
3	"			(取材班)			4[2](0)		
4	1990	夏	北西壁	横浜山岳協会	岸本五三男	●	12[5](0)	2 [0]	
合 計			4隊	66人			66[12](0)	9 [0]	2 [0]

中国山別入山一覧表

(1999年 1月 山森欣一作成)

*凡例 隊員・登頂・死亡各欄の数字はそれぞれ順に、総数・[中高年者数]・(女性者数)・[女性の中高年者数]である。印欄は ★偵察 ◎初登頂 ○登頂 ●初登攀 ×断念 △その他

卓 奥 友

*同行取材班については、BCが4,000m未満(或いは公路沿い)については除外を原則としたが、上部にて活動に参加した者については、その員数だけ別記した。BCが5,000m以上については別記を原則としたが、一部記者だけのケース等については登山隊に含めたものもある。

(偵察は許可を得てBC以上で登山活動したものを対象とした)

	年度	季節	ルート	派遣母体名	隊長名		隊員数	登頂者数	死亡者数
1	1987	秋	西北西	カモシカ同人	高橋 通子	○	10[4](1)[1]	8[3](1)[1]	
2	1988	秋		日本ヒマラヤ協会	山田 昇	○	40	4[0]	
3	1990	春		学習院大学	荒川 一郎	○	13[1](0)	2[0]	
4	"	秋		第二次RCC	深田 良一	×	8[6](1)[0]	8,050mまで	
5	1991	秋		シルバートートル	神崎 忠男	○	15[14](4)[4]	4[4](1)[1]	
6	1992	秋		カトマンズクラブ	八橋 秀規	○	14[9](3)[2]	11[5](1)[0]	
7	1993	秋		群馬県山岳連盟	八木原罔明	○	12[3](1)[0]	12[3](1)[0]	
8	"	秋		東京登山隊	阿部 正巳	×	3[1](0)	頂上の一角に登頂	
9	1994	秋		日本大学	深瀬 一男	○	9[1](0)	2[0]	
10	"	秋	南西壁	日本	長尾 妙子	●	3[0](2)[0]	3[0](2)	
11	"	秋	西北西	北見山岳会	西川 建夫	×	8[5](1)[1]	7,600mまで	
12	1995	春		小西/山本	小西 浩文	○	20	2[0]	
13	"	秋		秋田	丸山 芳雄	○	13[7](2)[1]	5[3](0)	
14	"	秋		法政大学	太田 九二	○	7[2](0)	5[1]	
15	1996	春		札幌中央勤労者	佐藤 信二	○	82[0]	82	
16	"	秋		野口	野口 健	○	10	1[0]	
17	"	秋		国際公募隊	R.ブライス	○	4[3](4)[3]	4[3](4)[3]	統素美代含む
18	"	秋		日本/カザフ	倉岡 裕之	×	5[2](0)	8,050mまで	1[0]
19	1997	春		奥州山岳会	角谷 道弘	○	4[0](1)[0]	4[0](1)	
20	1998	秋		谷口	谷口 正彦	○	2[2](0)	2[2]	
21	"	秋		国際隊	諸岡慶太郎	○	10	1[0]	
合 計			21隊	146人			146[62](22)[12]	78[26](13)[5]	10

マ カ ル ー

	年度	季節	ルート	派遣母体名	隊長名		隊員数	登頂者数	死亡者数
1	1995	春	東 稜	日本山岳協会	重広 恒夫	●	13[3](1)[0]	80	下部初登攀

ガッシャーブルム I

	年度	季節	ルート	派遣母体名	隊長名		隊員数	登頂者数	死亡者数
1	1989	春	東 面	横浜山岳協会	福島 正明	★	20		
2	"	夏	東 稜	宮城県山岳協会	八嶋 寛	×	12[4](1)[0]	6,100mまで	

ガッシャーブルム II

	年度	季節	ルート	派遣母体名	隊長名		隊員数	登頂者数	死亡者数
1	1998	春	東 面	立教大学	奥原 宰	★	6[5](0)	5,800mまで	

中国山別入山一覧表

(1999年 1月 山森欣一作成)

* 凡例 隊員・登頂・死亡各欄の数字はそれぞれ順に、総数・[中高年者数]・(女性者数)・[女性の中高年者数]である。印欄は ★偵察 ◎初登頂 ○登頂 ●初登攀 ×断念 △その他

* 同行取材班については、BCが4,000m未満(或いは公路沿い)については除外を原則としたが、上部にて活動に参加した者については、その員数だけ別記した。BCが5,000m以上については別記を原則としたが、一部記者だけのケース等については登山隊に含めたものもある。

(偵察は許可を得てBC以上で登山活動したものを対象とした)

シ ジャ パ ン マ

年度	季節	ルート	派遣母体名	隊長名		隊員数	登頂者数	死亡者数	
1	1980	秋	北東稜	女子登攀クラブ	田部井淳子	★	4[1](4)[1]	6,100mまで	
2	1981	春	北東稜	女子登攀クラブ	田部井淳子	○	9[2](9)[2]	11[1]	
3	"			(取材班)			2[1](0)		
4	1982	秋	北東稜	高所研究所	原 真	○	8[1](0)	7[1]	中央峰
5	1986	秋	北東稜	国際隊		×	10	不明	尾崎隆
6	1988	秋	北東稜	日本ヒマラヤ協会	山田 昇	○	40	3[0]	
7	1989	春	北東稜	愛知学院大学	寺西 申生	○	15[3](0)	3[1]	
8	1990	春	北東稜	京都大学	戸部 隆吉	○	30[9](2)[0]	15[2](1)[0]	中央峰
9	1991	秋	北東稜	長野県山岳協会	清水 澄	×	14[6](2)[1]	7,850mまで	2[1](0)
10	"	秋	北東稜	立正大学	古川 史典	○	10[1](0)	2[0]	中央峰
11	1992	春	北東稜	福岡	成末 洋介	○	4[3](0)	2[2]	中央峰
12	"	秋	北東稜	カトマンズクラブ	八橋 秀規	×	13[8](3)[2]	7,700mまで	
13	1994	春	北東稜	雪豹同人	近藤 和美	○	8[6](0)	6[5]	中央峰
14	1995	秋	北東稜	Y. M. S	小西 政継	○	9[6](0)	4[3]	中央峰
15	1997	秋	北東稜	長野県山岳協会	清水 澄	×	3[2](0)	7,850mまで	
16	"	夏	北東稜	マウンテンゴリラ	安村 淳	×	8[7](1)[1]		
合 計		16隊	142人				142[56](21)[7]	43[15](2)[1]	2[1]

ミ ニ ヤ ・ コ ン カ

年度	季節	ルート	派遣母体名	隊長名		隊員数	登頂者数	死亡者数	
1	1980	秋	東 面	北海道山岳連盟	京極 紘一	★	7[5](0)	4,900mまで	
2	1981	春	北東稜	北海道山岳連盟	金子 春雄	×	26[4](1)[1]	頂上直下まで	80
3	1982	春	北東稜	市川山岳会	斎藤 英明	×	7[0](2)[0]	頂上直下まで	10
4	"	秋		市川山岳会	斎藤 英明	△	60	遺体収容+4,550m	1[0]
5	1990	春	北西稜	北海道山岳連盟	川越 昭男	×	5[3](0)	6,540mまで	
6	1991	秋	北東稜	日本ヒマラヤ協会	山森 欣一	×	12[3](0)	6,400mまで	
7	1994	秋	北東稜	日本ヒマラヤ協会	山森 欣一	×	7[3](1)[1]	6,050mまで	40
8	1995	春	東 面	81年遭難者捜索	氏家 英紀	△	9[8](0)	4,350mまで	
9	1996	春	東 面	松田	松田 幸一	×	1[1](0)		
10	1997	春	北西稜	札幌山岳会	芳賀 正志	●	7[4](1)[0]	2[1](0)	
11	"	秋	北西稜	横断山脈研究会	須藤 建志	×	4[2](0)		
12	1998	秋	北西稜	横断山脈研究会	須藤 建志	×	5[4](0)	6,400mまで	
合 計		12隊	95人				95[37](5)[2]	2[1](0)	140

ニ ン チ ン ・ カ ン サ

年度	季節	ルート	派遣母体名	隊長名		隊員数	登頂者数	死亡者数	
1	1985	秋	南 面	大分県山岳連盟	奥田 勝幸	×	13[3](1)[0]	6,800mまで	
2	1992	夏	南 面	自衛隊山岳連盟	大崎 直彦	○	6[1](0)	1[0]	
3	1995	夏	西 面	栃木県高体連	石澤 好文	●	18[5](0)	11[4]	
4	"	夏	南 面	福岡大学	山内 一男	○	9[6](0)	4[3]	
5	1997	夏	西 面	日本ヒマラヤ協会	天城 敏彦	○	13[9](0)	9[6]	
6	1998	夏	西 稜	日本ヒマラヤ協会	関根 幸次	●	9[6](1)[0]	3[3](0)	
合 計		6隊	68人				68[30](2)[0]	28[16](0)	

地域ニュース

《ネパール》

クロス・ピーク登頂を考える

98年10月8日、宮沢美渚子(65)が、カンチェンジュンガ山群のクロス・ピーク(6,510m)に初登頂した。報道や雑誌によると、日本国内では、JAC経由で日山協から推せん状を得た。カトマンズの代理店を通じてネパール政府に申請し、許可を取得できるとの感触を得て出発。観光省との会見では「許可はグンサに送る」との言質を得て、許可は出るものと確信して、サーダーと共にヘリコプターでグンサへ飛んだ。しかし、9月24日になっても登山許可書は届かず、そのまま登山を開始した。下山後、期待していた登山許可証はおりていないことがわかった。ネパールでは公式には登頂を公表できない、という。以上が伝聞である。二つの不思議がある。日山協は、申請があれば

ネパールの未解禁峰にも推せん状を出すのか。許可書はグンサに送る、と云った観光省は何故連絡官を同行させなかったのか。美談でいいのだろうか。登山手続きに腐心している人もいる。(山森)

富士レストラン閉店

カトマンズを訪れる日本人には馴染みの深かった「富士レストラン」が、1999年3月末をもって閉店する予定である。(T.H.I提供)

東京集会のお知らせ

日時 2月22日(月)午後7時～
内容 中国/ブータン国境の山々について
場所 HAJルーム(地下鉄有楽町線東池袋下車4番出口から地上に出て右へ徒歩2分)
又は、JR大塚駅下車、都電荒川線の早稲田方面2つ目の東池袋4丁目下車、前方で右に折れて地下鉄出口から徒歩2分)

山の情報誌「岳人」

GAKUJIN

岳人

毎月15日発売(日・祝日の場合は前日) 定価700円

■本誌の年間購読ご案内

本誌の購読は、全国の書店、東京新聞販売店、中日新聞販売店、北陸中日新聞販売店で承ります。

直接購読ご希望の方は、とじ込みの振替用紙に「岳人何月号」からお書きのうえ、送り先郵便番号、住所、氏名を明記して、ご送金ください。

郵送料は124円です。年間購読料は8,900円で送料は当社負担です。

お求めの本誌に乱丁、落丁がありましたらお取り替えいたします。

99年

特集

- | | |
|--------|--------------------|
| ★ 1月号 | 雪の槍ヶ岳・穂高連峰・笠ヶ岳に登る |
| 2月号 | 再発見・八ヶ岳 森の逍遥から氷瀑まで |
| ★ 3月号 | 魅惑の雪稜、滑降三昧の後立山連峰 |
| 4月号 | 残雪の上越国境、奥利根源流を訪ねて |
| ★ 5月号 | 新緑の頸城・戸隠 北の山、南の山 |
| 6月号 | 南アルプス、鋸岳から光岳、深南部へ |
| ★ 7月号 | 花、尾根、沢の東北の盟主・朝日と飯豊 |
| 8月号 | 幽遠の黒部溪谷、岩壁、源流、高原へ |
| 9月号 | 森と尾根と谷、紀伊半島の大峰・台高 |
| ★ 10月号 | 南会津と奥美濃、山里の魅力も探る |
| 11月号 | 秋深い奥秩父と西上州 その山と人 |
| 12月号 | 岩と雪の殿堂・剣岳と立山連峰へ |

(★は特大号・800円となります)

東京新聞出版局(中日新聞) 〒108-8010 東京都港区港南2-3-13 TEL 03-3740-2674
(東京本社) 全国の書店で発売中/中日新聞販売店でも取りつぎます

■ 寸 感 ■

ヒマラヤ登山の世界でも「規制緩和」が進んでいる。よかれと考えると汗を流してそれが実現した後には情けない。「こんな筈ではなかった」ようにならないことを祈るばかりである。(山森)

事 務 局 日 誌 (1月)

- 2日(土) CMAから来日日程一部変更FAX
入る。
- 6日(水) 仕事始め
- 8日(金) CMAから来日決定FAX入る。
- 9日(土) チョム・カンリ隊第1回合宿(於・
ルーム、山森、野沢井)
- 11日(月) ヒマラヤ327号発送
- 18日(月) チョム・カンリ隊山本隊員へ返金。
- 19日(火) HAT-J、テイクイン、テイクア
ウト、テキスト改訂協議(山森)
- 20日(水) アテネ書房「ヒマラヤへの挑戦」重
版の件協議

- 23日(土) カバン〜ナムナニ隊、アルタイ隊第
1回合宿(於、ルーム)
- 25日(月) 新春マスコミ懇談会(日山協主催、
於ランド・マーク、山森)
東京集会(26名)
- 31日(土) 第20回インド・ヒマラヤ会議(豊島
区民センター(35名))

ヒマラヤ No.328 (3月号)

平成11年2月10日印刷 11年3月1日発行
発行人 稲田定重
編集人 山森欣一
発行所 日本ヒマラヤ協会
〒170-0013 東京都豊島区東池袋4-2-7
萬栄ビル501号
電話 03-3988-8474
郵便振替 00100-6-48954「日本ヒマラヤ協会」

THE GAMOW BAG

高山病対策の必携品

ガモフバッグとパルスオキシメーターのレンタル開始!

加圧しただけで約2000m下山したのと同じ環境を作るガモフバッグ、高山病診断、予防のためのパルスオキシメーター。高所を目指すあなたをそろって力強くサポートします。

- ガモフバッグ(携帯用高压バッグ/総重量6.7kg)
- パルスオキシメーター
(血中酸素飽和度測定装置/重量380g/単3乾電池4本使用/携帯型)

総代理店：日本メディコ株式会社

レンタル・販売問い合わせ先：株式会社 ティ・エッチ・アイ

〒135 東京都江東区木場2-5-7 KHビル7階
TEL: 03-5245-0511 FAX: 03-5245-0510
(隊荷の輸送、航空券の手配などもお任せください。)

TREASURE TOUR



EXPEDITION & TREKKING

自分の旅だから、自分でつくる。そんなあなたを応援いたします。

—— 遠征隊、トレッキング、秘境への旅 ——

あらゆる申請・許可取得、現地手配、航空券、山岳保険など、
お客様のご要望に遠征経験豊富なスタッフがご答えします。



マウンテンラベル株式会社

〒105 東京都港区新橋3-26-3 会計ビル4F

☎03-3574-8880

三井航空サービス代理店2452号

遥かなる高みへ



個人・グループの手配旅行、航空券の取り扱い専門デスク



キャラバンデスク TEL03-3237-8384

～地球の果てまであなたのキャラバンのお手伝い～

トレッキング・登山隊の許可取得から航空券・現地手配までお引き受けいたします。
～ネパール・インド・ブータン・パキスタン・東南アジア・アフリカ・南米～

トレッキング・海外登山
シルクロード・秘境旅行
のバイオニア



株式会社 西遊旅行

東京本社 〒101 東京都千代田区神田神保町2-3-1岩波書店アネックス5階 ☎03(3237)1391(代表)

キャラバンデスク 〒101 東京都千代田区神田神保町2-3-1岩波書店アネックス5階 ☎03(3237)8384(代表)

大阪営業所 〒530 大阪市北区神山町6-4 北川ビル5F ☎06(367)1391(代表)

カトマンズ営業所 JAI HIMAL TREKKING(P) Ltd. P.O. BOX3017 KATHMANDU, NEPAL ☎221707

運輸大臣登録一般旅行業607号

ヒマラヤへの装備

●遠征隊の装備、相談にのります。



Mt. EXPEDITION SHOP ICI ISHII SPORTS

- 登山本店/〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3208)6601代
- スキー&カヌー本店/〒169 東京都新宿区大久保2-18-10 ☎03(3209)5547代
- 新宿西口店/〒160 東京都新宿区西新宿1-16-7 ☎03(3346)0301代
- 新宿南口店/〒151 東京都渋谷区代々木1-58-4 ☎03(5350)0561
- 神田登山店/〒101 東京都千代田区神田神保町1-8 ☎03(3295)0622
- 神田店/〒101 東京都千代田区神田神保町1-4 ☎03(3295)3215
- 神田ウェア一館/〒101 東京都千代田区神田神保町1-6-1 ☎03(3295)6060
- 八王子店/〒192 東京都八王子市横山町3-12 ☎0426(46)5211
- アネックス八王子店/〒192 東京都八王子市横山町3-6 ☎0426(46)3922
- 川越店/〒350 埼玉県川越市南通町14番4 ☎0492(26)6751
- 大宮店/〒330 埼玉県大宮市宮町2-123 ☎048(64)15707
- 高崎店/〒370 群馬県高崎市新町5-3 ☎0273(27)2397
- 松本店/〒390 長野県松本市中央2-4-3 ☎0263(36)3039
- 新潟店/〒950 新潟県新潟市東大通2-5-1 ☎025(243)6330

- 新潟ブルーカ店/〒950 新潟県新潟市天神1-1 プラカ3 B1 ☎025(240)2316
- 仙台店/〒980 宮城県仙台市宮城野区榴岡4-1-8 ☎022(297)2442
- 盛岡大通店/〒020 岩手県盛岡市大通1-10-16 ☎0196(26)2122
- 札幌店/〒060 札幌市中央区南二条西4-8 ☎011(222)3535
- ルート36真栄店/〒004 札幌市豊平区真栄一条2-13-2 ☎011(883)4477
- 北十二条店/〒001 札幌市北区北十二条西3-5 ☎011(747)3062
- 2番街店/〒060 札幌市中央区南二条西1-5 ☎011(219)1413
- 旭川店/〒070 旭川市六条通8-37-2 ☎0166(24)5300
- 外商部(メールオーダー)/〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3200)7219



ICI 石井スポーツ

事務所/〒169 東京都新宿区百人町1-4-15 ☎03-3200-1004